札幌市教育文化会館情報誌「らく」

2014.1

33

楽

Sapporo Education and Culture Hall News

RAKU

笑いの超特急が13丁目にやってくる！
笑劇一座、集大成公演。

札幌市教育文化会館

札幌市教育文化会館情報誌「楽（らく）」は舞台芸術を気軽に
楽しんでいただきたいという思いを込めて名付けられました。

［市民喜劇団「教文13丁目笑劇一座」第14回 教文13丁目笑劇場］

笑いの超特急が13丁目にやってくる！笑劇一座、集大成公演。

笑いには、年齢も、性別も関係ない。それは、笑う側だけの話だろうか？

「やる側もみる側も楽しく、笑って元気になろう」という札幌市教育文化会館の呼びかけで2008年に結成された市民喜劇団「教文13丁目笑劇一座」。現在メンバーは約50名。下は学生から70代までと幅広い年齢で構成されており、「教文13丁目笑劇場」の出演やデイサービスセンター、町内会の敬老会などの余興として出演依頼を受け、市内を中心に活躍を見せています。

そもそもの始まりは2005年からスタートしたプロ・アマ合同ライブ「13丁目笑劇場」でした。年2回開催されるこのライブにはオーディションを通過したアマチュアによる発表の場があり、ユニークで個性的な老若男女からたくさんの応募が集まりました。翌年にはお笑い芸人養成講座「13丁目笑学校」を開講。以来3組のプロ芸人を生むなど、少しずつ成果が生まれたことを受け、だれでも参加できる形式で「笑いの文化」を作れないか、という提案から「教文13丁目笑劇一座」が生まれました。

2010年からは脚本家でもあり演出家でもある棚田満氏の指導の下、「教文13丁目笑劇場」の舞台に向けて、オリジナルの作品作りを中心に活動。どの舞台もほぼ小ホールのチケットは完売となる盛況ぶりです。

全国的にも珍しい、市民による喜劇団「教文13丁目笑劇一座」。今年はいよいよ大ホールにての公演です。作・演出はお馴染・棚田氏。いままでにないスピード感のある舞台を鋭意制作中です。

実はこの公演後から「教文13丁目笑劇一座」は次のステージに進みます。制作や脚本なども団員で行う、本当の意味での「市民の、市民による、市民のための」喜劇団へとステップアップ。生まれ変わる前の一座の姿を、どうぞ生のステージでお楽しみください。

Interview / Mitsuru Tanada

作・演出／棚田 満インタビュー

素人だからなんて言いわけなし、超特急に面白い舞台を。

2010年
「スパーク！ 忠臣蔵！」

2011年
「キネマの怪人」

2012年
「浅草パラダイス」

忠臣蔵、オペラ座の怪人、時代劇映画の丹下左膳と、これまでの舞台には必ず元となる作品が。今回はパニック映画全般をパロディ化しているそう。

―4作目となる今回の見どころは。

棚田「なんといってもパニックアクションもの、というところでしょうか。超特急の新列車「アルバカ号」が走り出すと制御システムが利かなくなり、ブレーキが壊れ、と次々と事件が起こる。そこに居合わせた乗客、乗務員が一癖も二癖もあり、さらにパニックは続く…という話です。映画ではよくあるパニックアクションものですが、芝居だとなかなかありません。これまでの作品は人情喜劇と言いますか、泣かせる話が中心で、笑いは意識的には入れていませんでした。ですが笑劇一座はもともとコントやドタバタ喜劇が得意な劇団。今回はそれをおもいっきり生かして、ドタバタあり、アクションあり、パニックありにして、速い展開で見ている人を飽きさせない内容にしています。

―今回、笑劇一座は初の大ホール公演ですね。

棚田「そこはあまり気にしていないです。やろうと思えばなんでもできるんですよね、舞台って。たとえばヘリコプターを飛ばそう！と思ったら、映画だと本物やCGを駆使してリアルに作りますけど、舞台は張りぼてのようなものが出てきても、観客は『これはヘリコプターだ』と見立てて楽しめるわけです。歌舞伎の黒子みたいなものですね。『黒子は見えていない』と見立てて楽しむ。そういうところが舞台の面白さですから。それに、笑劇一座が大ホールで芝居を打てる機会はなかなかないと思うので、見逃すのはもったいないですよ」

―では最後にメッセージを。

棚田「客席には出演者の身内の方もいらっしゃるでしょうが、出演者が出てきただけで喜ばれる、という舞台にはしないつもりです。スピード感や笑い、ストーリー展開など、どんな方が観ても面白いものを作っています。是非足をお運びください」

［演出家］

棚田 満 Mitsuru Tanada

札幌の劇団「劇団怪獣無法地帯」主宰。演出家・劇作家・役者。多くの役者が登場するドタバタのコメディに定評がある。毎年夏に行われる教文短編演劇祭に参加し、2008年には演出を、2009年には作・演出を手掛け同演劇祭2連覇を果たした。また笑劇一座公演においては平成22年度からの作品すべての作・演出も手がけ、笑って泣ける笑劇一座の新境地を開拓した。

第14回 教文13丁目笑劇場

列島弾丸超特急

2014年3月2日［日］
13:15開場　14:00開演

札幌市教育文化会館 大ホール
全席自由: 1,500円
（教文ホールメイト 1,200円）

［チケット取り扱い］
教文プレイガイド
tel.011-271-3355
ほか市内各プレイガイドにて発売中

教文13丁目笑劇一座とは

2008年に「札幌で笑いの文化を育てよう」という札幌市教育文化会館の呼びかけに集まり、翌年「第8回教文13丁目笑劇場」で旗揚げ公演をおこなった、全国でも極めて珍しい札幌発の市民喜劇団。笑いをこよなく愛する年齢も職業もさまざまな市民によって構成されている。市内・近郊へのお笑い出張公演も行い、市民にあたたかく、ほがらかな笑いを届けている。出張公演は、随時受付中。公演日時は要相談。詳しくは、教育文化会館事業課までお問い合わせください。

演劇を通じた創造都市札幌の実現をめざして

札幌演劇シーズン2014-冬

SAPPORO ENGEKI SEASON＊14/W

過去に札幌で上演された名作舞台の数々を、夏・冬の季節で毎日公演する「札幌演劇シーズン」。
かつて観た人にはもう一度、見逃した人にははじめての感動を贈るプロジェクトです。
札幌市教育文化会館では札幌座による「西線11条のアリア」を上演。真冬の札幌の物語を、心ゆくまでお楽しみください。

札幌座第42回公演

西線11条のアリア

作・演出・音楽　斎藤 歩

2014.2/8(土)～9(日)・11(火祝)～15(土)

［会場］札幌市教育文化会館 小ホール

札幌に実在する電停で起こった、不思議な出逢いと、旅立ちの物語。

雪嵐が舞う、真冬の札幌。ススキノに向かうため、吹き曝しの電停で市電を待つ一人の男。やがて、奇妙な人たちが集まってくる。見た目はまあまあ普通。でも何だか様子がおかしい。炊飯器を抱えた姉弟がやって来て、ご飯を炊きはじめた。驚く男を巻き込んで、食事の準備が進められる。炊き上がったピカピカのご飯。まさか、あんなところが冷蔵庫だったなんて！

［札幌座 プロフィール］

札幌座の前身TPS（シアタープロジェクトさっぽろ）は、1996年に北海道演劇財団の付属創造集団として発足、2001年に劇団化。2012年4月、札幌でプロフェッショナルな演劇活動を目指す演劇人が共同で活動する場となるよう機構改革し、名称も「札幌座」に変更しました。専属メンバーのほか、他劇団で活動する人も加入できるシステムで、作品ごとに多くの演劇人が参加しています。札幌で年5～6本の公演を行うほか、毎年、国内外のツアーも行っています。

M E S S A G E　メッセージ

大学に入って札幌に住み始めた30年前、私はこれだけ雪の多い街に路面電車が走っていることに驚きました。吹雪の夜、電車通りを車で走っていると、道路の真ん中で雪まみれになりながら一列に並んで電車を待つ人がいる風景に驚愕したのです。北海道で生まれたものの本州で育ってしまった私には、北国に生きる人たちにとっての当然の営みが異常なことに見えたのです。

あれから20年の歳月を経て、何食わぬ顔をして雪まみれになりながら道路の真ん中で電車を待つ北国の人になっていた私は、2005年の12月にこんな演劇を創ったのです。

市電の停車場にはきっと、コンセントがあるに違いありません。そこに炊飯器を持って行けば、ご飯が炊けるに違いありません。日本人に生まれ、右手にお箸、左手にお茶碗を持つことを身に付け、北国に生きる私たちは、ご飯のおかずに事欠きません。タラコ、筋子、漬物、岩海苔の佃煮、飯寿司・・・私の人生最後の晩餐には、炊き立ての北海道米の真っ白なご飯と、北海道産の美味しいおかずが食べられればそれで満足です。

雪国札幌で、普通に生きて、普通に死んだ、数々の無名の人たちの生きた証をノロノロと、路面電車は運んでくれているんだと思う私は、札幌市営交通の粋な計らいに感謝しつつ、真冬の教育文化会館小ホールで皆さんをお待ちしています。

札幌座チーフディレクター
斎藤 歩

札幌での演劇創造の他、東京を拠点に映画、テレビ、舞台出演など、活動は多岐にわたる。2000年に演出した「逃げてゆくもの」で文化庁芸術祭優秀賞を受賞。2002年には、作・演出・出演した「冬のバイエル」が東京新聞の現代劇ベスト5に選ばれた。

スケジュール

1日目

2014年3月20日（木）
14:30（受付）15:00（開講）

講座1　プレゼンテーション　入場無料

15:00～16:20

［イントロダクション］

コミュニティにおける演劇・ダンスの役割について

司　会：川崎 陽子（京都芸術センター）
発表者：熊谷 保宏（日本大学芸術学部教授）
　　砂連尾 理（ダンサー）

講座2　砂連尾 理ワークショップ

16:30～18:00

砂連尾 理によるワークショップを体験。

ファシリテーター：砂連尾 理（ダンサー）

講座3　プレゼンテーション

18:30～19:30

教文コミュニティダンス部による成果発表、スライドを使用しての活動報告。アフタートークを予定。参加者との質疑応答もおこなう。

発表者：櫻井 ひろ（教文コミュニティダンス部ファシリテーター）
　　高橋 ちひろ（教文コミュニティダンス部ファシリテーター）
　　岩澤 孝子（教文コミュニティダンス部ファシリテーター）
司　会：桑原 和彦（札幌市教育文化会館）

2日目

2014年3月21日（金・祝）
12:30（受付）13:00（開講）

講座4　ダンスによる事例紹介　入場無料

13:00～14:30

［基調講演］

**京都芸術センターによる
ダンスコミュニティづくりの取組**

発表者：川崎 陽子（京都芸術センター）

講座5　砂連尾 理ワークショップ

15:00～17:00

砂連尾 理によるワークショップを体験。

ファシリテーター：砂連尾 理（ダンサー）

講座6　ディスカッション（シンポジウムまとめ）

17:30～19:00

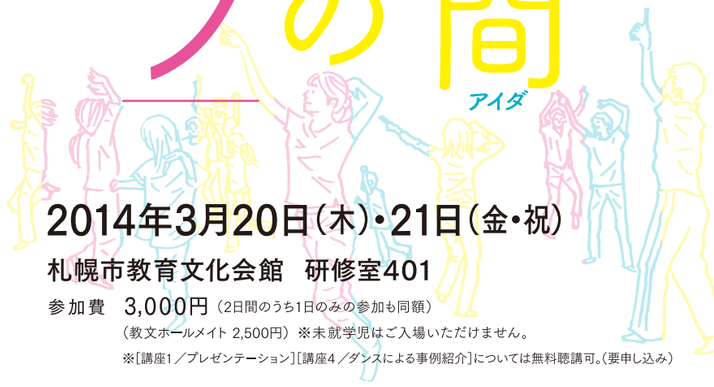
コーディネーターの司会による発表者、ファシリテーター等の対談、参加者との質疑応答もおこなう。

司　会：川崎 陽子（京都芸術センター）
パネラー：砂連尾 理（ダンサー）
　　熊谷 保宏（日本大学芸術学部教授）
　　櫻井 ひろ（教文コミュニティダンス部ファシリテーター）
　　桑原 和彦（札幌市教育文化会館）

平成25年度 ダンスシンポジウム

［砂連尾（ジャレオ） 理（オサム）ダンスワークショップ］
＋［レクチャーシンポジウム］

ダンスとライフの間（アイダ）



2014年3月20日（木）・21日（金・祝）

札幌市教育文化会館　研修室401

参加費　3,000円（2日間のうち1日のみの参加も同額）
（教文ホールメイト 2,500円）※未就学児はご入場いただけません。
※［講座1／プレゼンテーション］［講座4／ダンスによる事例紹介］については無料聴講可。（要申し込み）

ダンスを体験し、語り合う2日間

今年で4回目を迎える札幌市教育文化会館主催「ダンスシンポジウム」。経験・年齢・性別に関わらずだれもが気軽にダンスを楽しみ、踊る楽しさを地域で共有する「ダンスコミュニケーション」を軸としながら、平成22年からスタートしました。

今回はテーマを「ダンスとライフの間」とし、地域で市民が触れ合うダンスについて知り、体験し、話し合う場を2日間にわたってつくりだします。

ゲストは、京都芸術センターからアートコーディネーターの川崎陽子氏。京都芸術センターにおけるダンスコミュニティづくりの取り組み、公共施設の役割と可能性について講演していただきます。

さらに、国内外でも活躍し、高齢者や障がいをもつ人とのダンスづくりを続ける振付家・ダンサーの砂連尾理（じゃれおおさむ）氏によるワークショップも予定しています。

また1日目のプレゼンテーション、2日目の最後に行われるディスカッションには応用演劇を研究している熊谷保宏氏も参加。演劇と教育の関係性についても触れながら、ダンスコミュニケーションを広い視野で語り合います。

前年度よりさらに充実した内容の2日間。ダンスという枠を広げ、日常の中にもプラスアルファできる楽しみを探る、アクティブなシンポジウムです。

写真：田邊真理

砂連尾 理／とつとつダンス

写真：草本利枝

砂連尾 理／劇団ティクバ＋循環プロジェクト